

「食料の安全保障と日本農業の活性化を考える Part 2」

シンポジウム開催の趣旨と実施要項

1. 趣旨：

わが国の食料自給率は40%程度の水準でしかなく、種々の施策の実施にもかかわらず、依然として低迷を続けております。これには様々な理由が考えられます。とりわけ、食生活が大きく変化している一方で、農地の減少と耕作放棄地の増加、農業担い手の減少と高齢化など資源の低利用と脆弱化がみられること、農産物販売価格の低下と生産・流通に関わるコストの増加に起因して農業所得が著しく減少していることなどにより、食料供給力が大きく低下していることがその背景にあります。他方、海外からは安価で良質な食料が輸入されています。これからもわが国の食料供給は、国内生産と輸入を組み合わせ、消費者需要の多様なニーズに応じていかなければなりません。

しかしながら、世界における食料需給の見通しに目を転じてみれば、今後需要の増加に資源の制約と環境の変化に伴い供給が追いつかない事態が予想されています。不透明で不安定な世界の需給見通しを前提にすれば、輸入への依存を深化させる方向ではなく、ある程度食料自給率を高め、そのための自給力を維持していくことが肝要といえましょう。また食料の安定確保への努力は、食料・農産物の供給地である農村を活性化させることにつながると同時に、自然資源を有効に利活用することによって成り立つ農業が、環境を維持・保全する役割も果たすことになるでしょう。

本シンポジウムは、以上のことを念頭におきつつ「食料の安全保障と日本農業の活性化を考える Part 2：日本の農業を変えよう！」と題して、世界の食料需給を取り巻くグローバルな視点を踏まえ、またわが国の食と農の現状を見つめ直すなかで、食生活の望ましいあり方、農業生産の新しい機軸、地域活性化の方向、食料・農業・農村の安定と発展に資する政策ヴィジョンの構築など多面的に議論を展開することを通じて、わが国の食料自給率向上へ向けたムーブメントを引き起こすことを目的に掲げています。

本シンポジウムで繰り広げられる活発な議論が、文字通り日本の農業を変える一つの重要な転換点となることを、主催者として期待しております。

2. 実施要項

- 1) 日 時：平成22年12月8日 13時30分より
- 2) 会 場：丸ビルホール（千代田区丸の内2-4-1 丸ビル7階 東京駅より徒歩1分）
- 3) 総合テーマ：「食料の安全保障と日本農業の活性化を考える Part 2」
日本の農業を変えよう！
- 4) 主 催：東京農業大学、毎日新聞社
- 5) 後 援：農林水産省、JA全中、JA全農、日本農学アカデミー、実践総合農学会、東京農業大学総合研究所研究会

6) プログラム：(敬称略)

開 会<13時30分～13時45分 スケジュール説明・出演者紹介>

河野 友宏 (東京農業大学教授・総合研究所所長)

主催者あいさつ<13時45分～14時15分> 2名

大澤 貫寿 (東京農業大学学長)

岸井 成格 (毎日新聞社主筆)

第Ⅰ部：現地報告<14時15分～15時15分> 4名

吉田 道明 (滋賀県Uターン 新規稲作農業者)

境谷 博顕 (青森県大規模土地利用型農業者)

仙石 利幸 (宮城県角田市農政課課長補佐)

坂本 廣子 (サカモトキッチンスタジオ主宰)

< 休 憩 15時15分～15時30分 >

第Ⅱ部：パネルディスカッション<15時30分～17時> 6名

テーマ：「どうしたら日本の農業は変わるか！」

(司会・進行)

中村 靖彦 (東京農業大学客員教授)

(パネリスト)

篠原 孝 (農林水産副大臣)

結城 登美雄 (民俗研究家、農業)

茅野 信行 (ユニパックグレイン (株) 代表取締役)

秋岡 栄子 (上海万博日本産業館館長、経済エッセイスト)

金田 憲和 (東京農業大学准教授)

クロージングリマークス<17時～17時15分 総括>

三輪 睿太郎 (東京農業大学教授)